

# 貞丈雜記

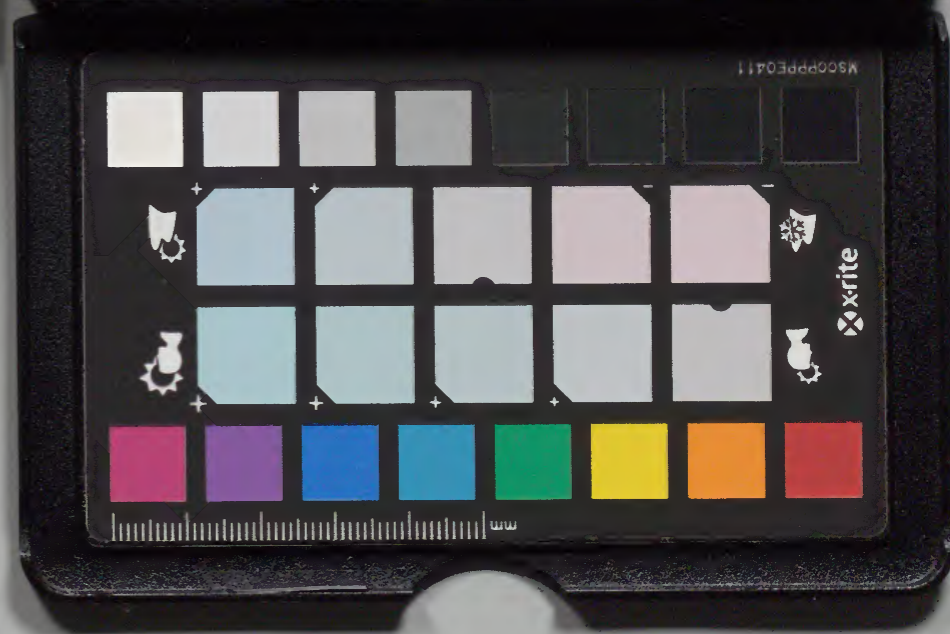
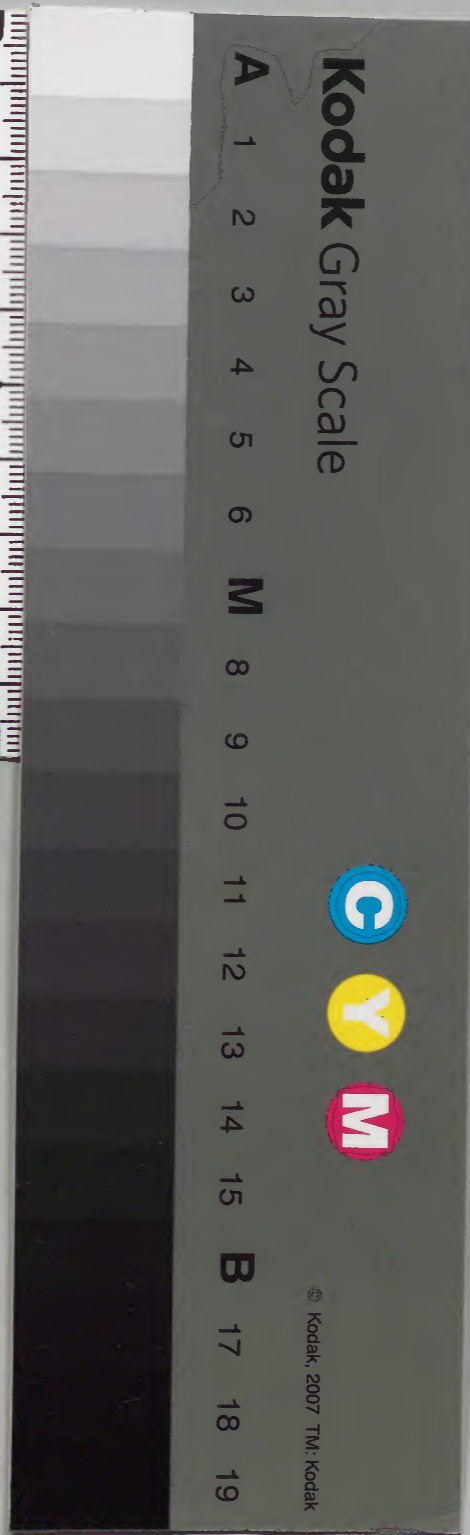
七

松田 本生

和書門			
二五〇八七	七	三	一六
類	號	函	冊

內閣文庫			
二五〇八七	七	三	一六
類	號	冊	函

內閣文庫	
番號	和 25087
冊數	15 ( 7 )
函號	212 19



貞丈雜記卷之七

膳部之部目錄

合子之事

折之事

衡重之事

木具之事

折敷

加んあけ

雜記七

平折敷 角不切 側折敷 三方四方を用る人品之事

一 柳子之事

一 柳子之事

一 柳子之事

一 煙草盆之事

一 土器之事

一 三方四方之事

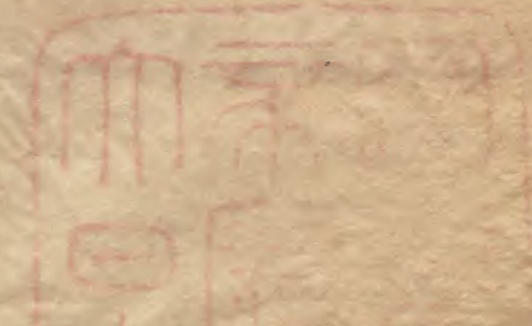
一 足付之事

一 片木

一 角小角

目一

松田 本生



- 一菓子蓋之事ハシ
- 一酒盃之事ハシ
- 一箸の筭ハシ
- 一饗之膳ハシ
- 一三峯米ニケ糸
- 一盛形之圖
- 一活てうし立ハシ
- 一飯櫃之事
- 一白木膳之事ハシ
- 一赤やりの事ハシ
- 一むき折ハシ
- 一丸ハシ
- 一果杯之事ニケ糸
- 一高塚之事ハシ
- 一行器之事ハシ
- 一飯ハシ
- 一破子ハシ



酒盃之部

- 一塗椀之事ハシ
- 一湯ふきの事ハシ
- 一土器之代磁器用事ハシ
- 一活鯉取板之事ハシ
- 一心葉の事ハシ
- 一献之事ハシ
- 一酒盃之事ハシ
- 一かぐえの事ハシ
- 一高盛之事ハシ
- 一かぐえの事ハシ
- 一懸盤之事ハシ
- 一藻分塩分之事ハシ
- 一様器之事ハシ
- 一塗盃之事ハシ
- 一婚禮盃の事ハシ
- 一五宮盃先後之事ハシ

- 一 世このり
- 一 懐利の事
- 一 桃子提子蝶形付る
- 一 祝言之瓶子之事 ニヶ条
- 一 桃子之柄包むる
- 一 筒之酒
- 一 さく九んこのり
- 一 さく摺このり 圖
- 一 押物このり
- 一 三ツ星五ツ星このり
- 一 酒の中弦る
- 一 柳樽の事 ニヶ条
- 一 瓶子置換る
- 一 桃子提子山松柄付る
- 一 鍬子片口両口このり
- 一 高臺このり ニヶ条
- 一 法通このり
- 一 内ごり土器このり
- 一 益臺
- 一 心掛け物

一 折の物

一 食籠物

- 一 桃子の柄ある星のり
- 一 勸盃之事
- 一 盃うらぬせこのり
- 一 削り花之事
- 一 拳固之事
- 一 太鼓樽之事
- 一 一殿中一献
- 一 白酒黒酒このり
- 一 さい越酌之事
- 一 桃子蓋をさる
- 一 酒廐の前の中一献
- 一 唐瓶子之事
- 一 棟立興之事 圖

輿類之部

一 輿四品有之事

一 棟立興之事

- 一 四方輿之事 圖
- 一 みせきぬ之事
- 一 輿の巾着の事
- 一 今世ぶつえぎりの事
- 一 籠の輿之事
- 一 車兵輿乗居うの事
- 一 一ノノノノノノノ
- 一 ちよくまんの事
- 一 塵取之事 圖
- 一 輿の下簾 圖
- 一 女輿金物之次才
- 一 今世糸物駕籠の事
- 一 京物と云る事
- 一 黄色輿之事
- 一 輿臺之事
- 一 檳榔毛車之事

以上

貞丈雜記卷之七

膳部之部

此部飲食之部ト合セ  
見ニシ施丁方ノ事モ入

伊勢貞友 同  
千賀春城 同  
門人 岡田光大 校

一 合子ガウシとも合器ゴキとも云ハ梳の事ニ云と云ハを合を執取の事  
合器を子施と書て免しん汁梳平皿つ不さるこし言乃  
五也と云说何也あやまり之平皿は不皿こし言と云物古ハ毎  
古ハ免しん汁免さるる平皿平皿手こし言物の代り作り  
者も免しん汁免さるる平皿平皿手こし言物の代り作り

ヒキレト云ハ木モ  
キテ入物ヲ作り名  
故ノ名ナルベシヒキレ  
ハヒキ入レト云ラ略シ  
タルナルベシ則合子  
ノ一ノ職人各歌合  
ヒキレウリノ詞ニハ  
イナバガウシニテモ  
ク

今の平さうつぢさうの廻りも細き筋をさく付るはらげ物  
まうつぢ入るをもすねくする  
輪を入る  
このまうつぢ  
わらぢけのまうつぢげ物の輪を基よりする形をすねくする物  
奉式の膳部は皆白木にて食物はうづけよりかきとらげ物の  
上小せのまうつぢけをまめる也食物の形よりして白木よりけ  
物ももすねくする物

一  
ぬかごま盤と云物系殿將軍の時代はありしに寛永年中  
南蠻國より渡りしとこれに旧記は煙草盤の形あり今の世  
乃あるはしと貴人の店前とあるを吸をぬを禮とするあり  
たあるすあり

文明十三年二月  
廿七日地方庶務  
能有貴殿ヨリ  
進上店折三合六  
寸六角云日記  
六角二折ヨリ  
ありあり

折櫃物トツケ  
テ云時ニハフリ  
ウツモノト云也

折と云ハ木を折らげて箱はまのり折と云是を折はあら折  
付る事ハあり折る合せて臺をしてを敷不足を付る也あら  
釘を打付る事あり臺はまのりの上へ水引をひけて結ぶ  
蟻川記云は折ハ三献め五献めより糸は為可松は名を献數  
女さ時ハ二献のよりも糸はまのりの物ハ著ハすらまのりの折  
肉はまのりの物ハまのりの物ハまのりの物ハまのりの物ハ  
まのりの物ハまのりの物ハまのりの物ハまのりの物ハ  
又格符よりすい  
ゆるもは志けりをはらげるともまのりて抽出ゆくと志けりとい  
水引を折を結ぶると云今時折と云ハ折る事不足を打付  
ふらをも打つて志の削を花をまのりの上へまのりて是ハ古ハ折と  
いす櫃物と云也折は金らん殿子ハ折と云今時折一合といはれ

茶と聞書云三元の  
 の圖は小ぢうへそを  
 かけ云又膳敷の  
 圖にて一合と云  
 小ぢうのるく  
 海人藻芥云鍾へ  
 イカウ二度入三度  
 入置也然二近代間  
 物五度入塞鼻如  
 種々土器念出来  
 酒興盛故也  
 貞丈云武家ニテ  
 三度入忌也  
 事三ツ盃三度  
 酒又故ナリ

折了乃事と心得る人何りあるや  
 一合と云ハ一ツのり入す  
 一土器品カハラケのり小きをこぢう  
 ありをニど入と云ニど入より  
 大あるを大ぢうと云小ぢう  
 対しる名也さて又三ど入より  
 大ぢう以下三まわりは大き  
 大ぢうより二まわり大あるを  
 五ど入と云五ど入より三ま  
 わりを七ど入と云七ど入より  
 九度入十一度入十三ど入十五  
 何れも三廻まわり大き十五  
 度入より上段と大あるハ酒  
 用の舊記よりつけ物と有  
 此事之前云をいふけ

のりを小ぢうと云ハ三度入の  
 酒は守る小き土器ある故  
 三度入ハ盃は用ものつけ  
 酒ハ盃ハ三度入ハ酒ハ盃ハ  
 土器を三ど入と云大ぢうハ  
 三度入の外ハ重なり大ある  
 故大ぢうと云五ど入ハ三ど  
 入より大あるを五と云七ど  
 入と云九度入ハ下も同じ  
 のり三ど入五ど入七ど入  
 九ど入と云るハある  
 一をくびと云うつけあり式  
 膳敷記ハ大ぢうより但そく  
 びと云かけの然云貞衡云そ  
 くひと云うつけ有ハサもい  
 ちやく  
 一何いの物と云うつけあり  
 大草敷お侍書云あいの物  
 ハ三ど入







如此所を公なり  
とあり云  
供饗ノ車ヲ公脚ト  
書ル書モ有供饗  
本字也

カキイロ  
ヨダタシナキ  
を書きとりたる物之萬者記云云  
申之を晴の時に表ハ不歩物を以女中むきるを必おされハ  
一庭けりり朝を物を以教中見ても云云或云ぬを相ハ  
まうの相の畧云云是ハ漆ぬりを云

一 玉器のひねりたるもの取英記云云  
必筋有り軍陳門出ると云ひねりたるを前ハありて酒のまぬ  
相云云云云は胸ありといあるは胸ありあるは玉蕊の底可  
らづりまのめくあるは胸ありは胸ありあるは玉蕊の底可  
一 儀いりまのまの衝重と書て三方四方供饗の熱名へは儀いり  
也上の基と下の是とをつまみまのたの相ありあつては儀云云

三方は穴を何けるを三方と云四方は穴を何けるを四方と云  
穴をすもあけざるを供饗と云此之品ハ何れも同一形あり  
足付ハ御重の形はありず

一 三方四方の下はあける穴を今ハ有る云云右はげん志あり  
と云げん志ありをあけると云る上臈名之記は凡ハありげん  
志ありとい眼像と書て眼ハ目也目とい何ありある目像  
とい事ハ引目猪の目あり云目の字も皆穴の事と云同意之  
木具と云ハ是て檜の木の白木を作りたる基も皆木具也  
三方四方供饗ハ木具之類也今ハ足付のる斗を木具と云  
足付ハ足付と云折敷ハ足をお付るなく足付の折敷

雑記七

五





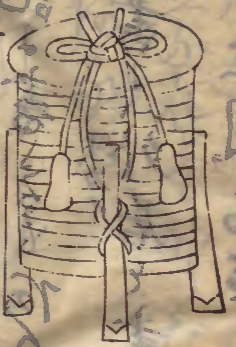




行器之圖

之条外居一荷トアリ

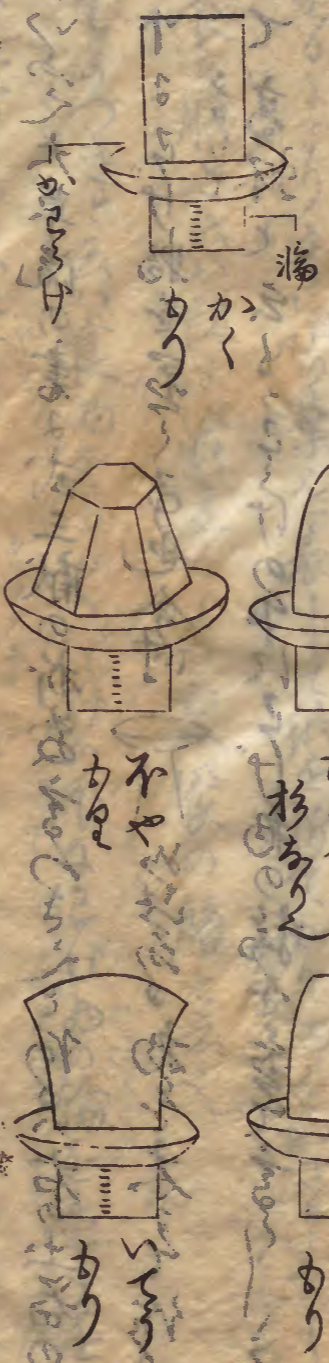
行器之圖



包結記を以て 元天 此圖を  
補入也 同書又云行器は  
赤飯まんぢうの形を以て食

封を付けて人の手へ送る器也 又云古ハ足あき行器も  
あり又足たのちのちありと云ふもあり 足あきまたいしと足  
たう不ありと云ふあり 又云り若くはめり又まき結を  
三つあり 大小不定也

名形乃名



一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也

元天の盤也食盤

一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也

一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也

一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也

一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也





一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也

一 此は元天の基なるは膳をのせ並く基のる也

雑記七

十

一 規式の膳形は白木を用ひ何きも土器盛るるは是一度  
 切用ひて用ひ終て後おこり捨てこれを二度用ひしき  
 此れ神國の風格にて清淨を要す故に神代よりけ  
 ざるもあつて人長物を柏の葉の形ありしと云され。膳形を  
 削りて云は此故とす傳より後世よりて白木の膳土  
 器などを金銀のちりまをみ 彩色をもすおこりか  
 一 白木土器を用ひ奉言を取らざるはむ也  
 一 破子ハカコと云はり子白木にて折のぬくは作りし物せがこは  
 一 新造の形丸くも四角三角も扇形も板の風  
 流はとも此の物せがこはたすも同し深さも板の方同

一 下ゆきあるを以て子と名づくうき物をもぬくも白木  
 一 作り一度切らうけ流しはるるえと云は弁の筒を  
 酒を入て持てを行を云奉外を切てを両方は置て上の  
 一 酒を入て持てを行を云奉外を切てを両方は置て上の  
 一 今時の漆椀スリヤンの形よりだうとて  此ある物何り是はかきけ  
 の下は輪を並る形を作りし者之又つ不ぎうとて  此  
 一 ある物あり又ひらうとて  此ある物ありつ不ぎう平ぎう  
 と云おこりげ物の形をうけ作りし廻りの細き筋は己げ  
 一 物よりつを入る形  細き筋を云 規式の膳は食物を盛る器  
 一 又物よりて白木の己げ物よりて土器の下は輪





と云也二條亞相記或人の云膳を訓トク加之波手といふ也

古柏葉を用て飲食を盛る故み加之波手と名づく云

又伊勢の神事此時より川のわがはとを大あるりしもの葉可

神酒をそぎてるりの司これにいふまきのむりありける

夫木抄鴨長明が伊勢記を引て志るせる異國より日本

まてのりその葉は飲食をあらるるを関傳て北史より書奏

九十四日本風の風俗を記しるなり俗無盤俎藉以櫛葉と

見えあり盤俎ハ食物を載る葉の事櫛ハハハの木也

一土器の代り磁器を用ること三光院内府記云木具土器面

向之叅會會席祝儀ハ必用之疾塗物ノ器平生受用之器勿論

又リ益モ後世ノ物ニ非ス大才天文ノ比記セシ貞頼色ノ記ニ見エタリ

無紋漆箔等随所各用之疾堅固内之儀ニ疾青瓷或白大臣朝夕之器也

道遙院称名院禁中御會叅内之時ハ自長橋局朝夕所用之茶碗密々被召寄令受用疾キ大臣ノ規模此分ニ疾

續古事談表圓融院大井河は後行ありて先少井寺

乃前は箱屋貞丈云箱をトハ箱ノ幕ヲ張リ四方ニシテ

おろしす大入道教攝政の時膳設れり茶碗を何りける

一懸盤の事三光院内府記云平生朝夕諸家可用此般事ハ

雖然各依無沙汰不用い當所受用物者一日晴ニ号檜懸般盤

俟打捨云不可用之器は貞丈云一日晴ト云ハ貞陸自筆記

云常ハ懸盤して糸ハ御基標も同前仕ハ精進の時ハ

足の付ある折巻りてきこりゆい懸盤とい何も外を漆

清少納言枕草子ニ云いけなるとりし何よりあらんまのべ



白木を楊器と云引入り至徳記にあり

以上北村季吟が  
源氏物語抄より

見あけ作説に箕  
形忍菴の説あり貞丈按盤のりくも一物也と云折敷の物と

すの薬器の盤と云茶をうけある如き物の折敷類の物也

関中又白木を楊器と云引入也と云白木の折敷の物と云

いづれも入る組ある物とすゆの法説さすゆの事又中

院通茂卿七十賀元禄十  
三年記に折敷三枚椀益  
蝶鳥又折敷一

枚椀益瓶子一口椀施と見あり楊器とも椀施とも書也源

氏と云るゆ椀のるきと何の銀と楊器の取を作りたる物

とすの白く椀のるきとすのりさうつとあるをいへる

きは蓋をのるきとす也又按楊も椀も此の字を用也と

楊の字本にありん然常れ折敷類の椀と作るをいへ楊  
の木とて作きて楊器と名付り椀椀と作家類を椀類  
と云類の名ら薬器といふ説ハ誤あり

酒盃之部  
 一 一盃二盃と云を一盃二盃の事と心得ある人ありあま  
 也何れも吸物肴あをを此也盃を出すハ一盃也次ハ  
 又吸物も肴も此也盃を出す是二盃ハ何レ  
 一ハ此也一ハ終ハ此也度々ハ此也 銚子を入て一盃毎子  
 銚子取あゝあゝと出すハ何レも此也  
 一 酒を一盃二盃と云ハ今時乃人の詞也古ハ一度二度といハ  
 一盃二盃ハ二交入五度入あゝと云ハ三盃入五杯と云ハ  
 一古ハ祝儀も古ハ盃と云ハ皆此也け之さの法も古

酒盃之部

一 一盃二盃と云を一盃二盃の事と心得ある人ありあま  
 也何れも吸物肴あをを此也盃を出すハ一盃也次ハ  
 又吸物も肴も此也盃を出す是二盃ハ何レ  
 一ハ此也一ハ終ハ此也度々ハ此也 銚子を入て一盃毎子  
 銚子取あゝあゝと出すハ何レも此也  
 一 酒を一盃二盃と云ハ今時乃人の詞也古ハ一度二度といハ  
 一盃二盃ハ二交入五度入あゝと云ハ三盃入五杯と云ハ  
 一古ハ祝儀も古ハ盃と云ハ皆此也け之さの法も古





琅邪代醉卷八云  
柳麴樽也曹植  
詩我何柳麴醜  
云々柳木ノコブク  
ル所ヲ以テ酒器ヲ造  
ルヲ西土ニアリト見エ  
リ

中をのむ人の盃を別人とて又中をのむ事あり

一 今徳利と云物を古湯といひる人むろくハヤまおの徳利也

監湯と云物ハ古湯と云ハ

柳樽と云物ハ木ノ樽也

の木を以て樽と云ハ

とハ大ニ遠あり古柳を用ひ

製あハ木ノ樽ハ樽と云ハ

一 又云柳一荷がと云ハ柳一樽一樽を合する柳一樽

と云ハ中流宜川也ハ文昭月記云二月廿七日地方所

能ハ柳樽也

と云ハ近年諸藝才賣買代物云云をき代古酒百文別

三枚新酒百文別四枚ト云ハこれらの文を以て見れば

百濟寺イナカ柳と云ハ酒を造り出せ不の地名ある

雪玉集ハ寄酒述懐と云題をよめる

つき天燈酒川と云ハ一人のを以て云ハ正月の事始

記云天野酒河内國ハ乱事ある時ハ京都見物樽を進上

見タリ河内國ハ畠山殿

銚子提子ハ蝶形を以て事ハ蝶ハのどくある日ハ出で草木

の花の香を吸ておのの友と云ハ

一祝は綿をつる  
蚕の蝶はありける  
う子を多くくむ  
物魚もこのころを  
んで子孫繁昌を  
祝ひて蚕の蝶の  
形を祀りまはす  
と云ふは祝の蝶  
礼をまはすは  
考そのまはす  
也

人もそのごころ酒をのこす人の中よりまらこびりしむ  
腹をいさうひおとするはよめぬる也され酒のむ人蝶の花  
の意を吸てあそびよめぬる也され酒のむ人蝶の花  
形を付るあり籠子は蝶花形付るも同じ心也  
一籠子一對口を蝶花形に包む時は花の方より男蝶  
右の方より女蝶也

一糸の團書は祝言の時籠子の口を蝶花に包むは包まざる  
は包むと云はれぬべし何れは籠子授子と籠子一對と  
蝶形ははけぬ蝶の教四つはありて四の字を忘むは  
一籠子の口外は包むもまらざる形に包むは包むは

と云ふ菱ハ水草を氷底まらびり志なり即ちのこも  
つよき物とらびり志なり即ちつよきを祝は用は酒も  
水鼓の物あるは菱の花形を口を包む也

一籠子提子祝の時松山たち花山たちを花を蝶花形に包む  
て付るは松は色も花も提子年を種物と山たち  
ハ冬も冬も雪霜はつよき物也実も赤く熟はる物也

二品ともめのまら物ある故祝は用はる也  
一籠子の柄を包むるはあき事之京都將軍殿中より用  
何れは籠子の柄を包むる大草流式之膳部記京都將

左工門尉云々記 籠子の柄をつまはるは流はあきしとあり



東鑑卷世酒杯入  
片口、鉈子置折敷  
上鉈子覆蓋

古今著聞集卷十四  
云白河院深雪ノ朝  
雪見ニ御幸アルト  
テ中畧朽葉ノカサミ  
著允童二人ヒトリハ  
沉ノ折敷ニ玉ノ盃銀  
ノ血ニ金ノ橋ニフサヲ  
モラレタルヲ持タリケリ  
一人ハ片口ノテウシサ  
シラテ持タリ去リ右片

口ノテウシト云ニ付テ  
モロク十ノテウシモ古  
ヨリ有シラ考ベシ  
海人藻芥云山名修  
理大夫入道 紀州佐州  
一比仁和寺三居佳之  
間年始ニ嚴向彼宿  
所之處三献ニ義アリ  
毎度各鐘也鉈子片  
口ヲ最タリ 此事高  
尾張入道以正難之  
云鉈子ノ最事、全  
分略儀也彼禪門家  
中ニ不足ナリ云、於以  
正雖不肖身、片口鉈  
子以下祝儀式ノ具  
足ハ武州師直ガ代リ  
京中、職人給之間如  
形不足ナシト云

莫板持系記云片口鉈子の柄包いり殿中モロク十は、と世に流あり云く  
されば柄を包む法式にあきる也又鉈子をフタエタ一為二枝と  
云也旧記に見えあり

一両口の鉈子モロク十ハ畧儀之古殿中ニハ片口を用ゝれ、魚板持  
系記ニ云ハ流の時ハ片口ニテ一式膳系記ニ云公方極ハ成を  
ニ外きるとし、ある時ハ片口ニテ糸いり口を包むる也、  
自然ウ口あき時、口より口ニテハ口の包持、他流ハ木  
の葉をのひ付、など、きのの葉ハ一向あきる、云々、系、  
よ云式三献為のハ盃の時ハ鉈子ハ口可成、公方極、  
正月五月ニ外、系、朝ハ口ハ口のハ鉈子白白ハ白めりきく宗  
上ニ冊按、まあり

は酒も白酒也又私持て片口にてし、かければ、口の口を包む  
也出陣の時も、外祝言も、か、口の鉈子を可用云、今の世  
片口の鉈子、後、皆、ち、口斗あり、一説にて、右、只、切腹  
の人ハ、酒の、時、口より酒を、出、常、ハ、包、おくと云  
ハ、何、ま、り、切腹人の用、表、口を、示、付、て、お、く、ハ、  
あ、す、ち、ち、口にて、し、ハ、大酒を、り、と、客、人、入、て、  
右の人ハ、丸の人、ハ、酒を、盃、ハ、入、を、き、る、ハ、両方、口を、  
多、切腹の用、表、ハ、あ、す、切腹人ハ、酒の、時、  
右の、と、丸口より酒を、出、之、鉈子の、持、持、ハ、丸、と、  
右の手を取、て、持、て、送、り、也、右より酒、出、り、右、口を

用ハ乱酒の時斗あり

一 此の酒と云ハ今世の筒の酒と云ハ同一又さき元々云升の葉をさきと云よりて升筒は酒を入る故さき元と云あり

一 今時蓬萊の湯基と云洲濱の基スハク三の山を作り松竹霍急あどを作りホウライそよよ青をさき若草の若より取りこれち

風流のるそ親式のるそあさすきと酒宴の興は出まへ又花をさき作り物して盃をおく盃基も五今乃世のごとく

祝儀ハ必蓬萊を用と云はハ前 東鑑卷四十九正元二年四月三日

庚子晴入御于入道陸奥守亭街息所御同車中畧御息所後

方は進風流造蓬云く又鎌田草子云君の是迄の以下向を一期

一 乃老んがういんげとどどと乃世を智蓬萊わうらうらいをめ標組くみ君をいん

やさんさめあうらうの志下組くみ魚と志鹿のとの入年鹿符まはハ

五人の子どもをバミ三河のこの國あまけの山一志鹿符のうらうはうらうはぬ

又内海うらうおき沖まおあなをわうらう貴鹿符てハ

一 今世の湯基と云物昔も有古ハ嶋形と云蓬萊も湯形の肉之

洲濱形鹿符め此の湯の板を作る海中の湯のまをい海鹿符より出る

三 飛石の園のめあを海濱と云これに湯形も洲濱くとも云

四 上よ青を盛るくめさうはハ岩木花をさきを置く太平記卷廿

四天龍寺供云御前ハ風流の湯形を居鹿符れり大井川の景趣

を表して氷紅錦を洗ひて感興の心を添貞丈うけ洲濱けり

永享室町殿行幸  
記云志は所盃  
とあり則嶋基ハ志

永享室町殿行幸  
記云志は所盃  
とあり則嶋基ハ志

又選注云竹葉酒也云

本草綱目竹葉酒  
諸風熱病清心  
淡竹葉煎汁如常  
藥酒飲之

蒸ハ有を盛のうふあふ古禁中月々草合花合根合かと云く色ハの物  
を合せ款をよみて與せしめり其合也相を多くハ洲漢の蒸を  
作せしめりそのせしめられしもの榮花相語古今著同集  
其外古き相傳ふるもの事ハ長き故略之

酒をさくともくらんとも云ハさくハ三也くらんハ九献之酒ハ

三三九度吞むを祝ひとする也九ハ陽數月々のさき數也

唐土も九献と云るあり左傳信公十二年の帝云楚子享于鄭  
九献と何れもの註ハ云用上公之禮九献酒禮畢云

一 正通云と云りし物と云りし物ハ貴人の口前各別出され

法酒酌するより一盞の美人の口前めり出されし物ハ通ると云常

よハめりし物と云常云元略記ハ元より酌仕扱香格也

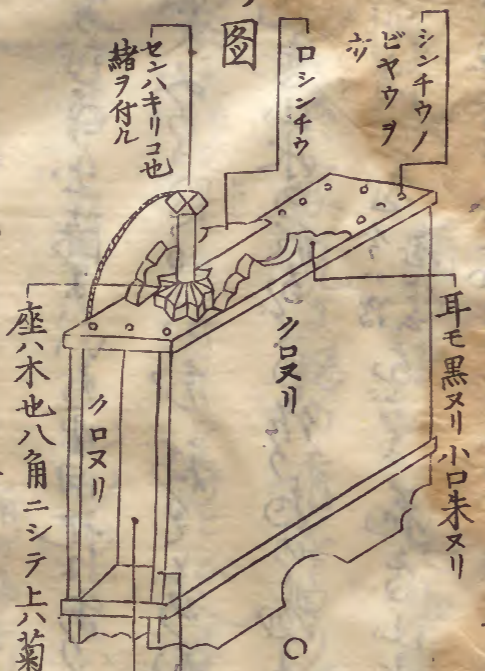
一 さく樽の事尺素往來ハ  
系於相傳  
例式指楯一個傳楯兩三

とありさくたるハ箱をさく樽をさくゆひるとハ常の柱

を入て  
あがをばあるゆひるを云くさく樽ハゆをや南世をさ

ぬおるれが後ハ何れものもあぬる後ハ繪圖を記也

指樽の圖



○惣辨黒ヌリ耳ハ朱ヌリ也

板ノ小口也朱ヌリ也

両方ノ小口如此引コニテ有

右のさく樽大あるも小きもあり今ハ世上ハ沢山ハあり

一 今時盃ハ用るものさけハ内ハありとて土器の内をさくニあり

星の板ハさくする土器あり内ハありとて名ハ旧記ハ見及ぶ





貞順色、記ニ云  
五、露を抄三方  
又何其も蓋を  
つけてうらみ  
も茶湯をわら  
のり出せせ  
けいして不苦  
但是略儀也  
むろりも  
時、蓋を膳の  
こめて出す  
まゝ

削花を本とま  
し紙花を  
削て

ておくるをいむはゆふ今時吸物膳の多し蓋をうらめせ  
蓋を人よめりなりいふくお儀也

一、さい越しの酌をききふ事さいお居也お居ハ座敷の隅へ

物のふおたる所を越して食物呑物の飲を人よめりを意

むろり子細囚人を捕へて率はおこりおる時座の

格子をぬきそ外を食杯湯水を入れおるお常

も物をぬきそ食呑物を人よめりをいむさいごの

酌まゝなり率、少書酌儀記おるなり

一、蓋の基を草木の花草を造り、さすり何うけつる  
を本とまし削花と本をめんをさす削花を夫と

作る削花を本とまし新續古今集の部 云ひえのふり  
おけて削花を削りてたがひよ水を合せて勝負を

ありけるを人よめりおびければおむきびはあてる  
僧都親教「草も木を佛よめりいふるれどをさるし」

かひきけれ 右の詞よりのけりもまは人よめり殿山は向つりて花方右方と  
方をかて色くの削り花を造りてたがひよ水を合せて勝負を

削花は昔よりあるに記しあり 又古今集の部 云二条の  
后春宮のみやすおとすけるをさるめどよけつる花をせりなる

をよめりおひる文屋をせりて「花の本は何ぞさるめどを  
咲くなりなり」このことあるとまゝなり

あゝ〜〜は信後のぬか先さ〜おきて私をひいていそめど、妻は也つ  
産はけり花をさるれ〜るる〜削花の糖の味おととまゝ削花

雑記七

廿六



御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米  
御膳料米

一 三問の...  
一 大...  
一 二...  
一 三...

輿類之部

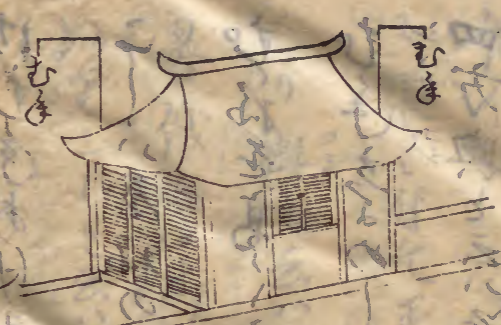
太平記三云主上  
笠置也波落の  
条二儀のあり  
あぢのあり  
よあぢのあり  
そりうのあり  
しげのあり  
けのせまひ  
て云く

一 輿<sup>コシ</sup>は四品有り一は板<sup>イタ</sup>二は網代<sup>アジロ</sup>三はそりおし四はぬり  
ごり<sup>ゴリ</sup>是之板<sup>イタ</sup>二は段親式を以て用之其次をれり時ち  
網代<sup>アジロ</sup>二は張<sup>ハシ</sup>二はぬり<sup>ヌリ</sup>二は畧儀也<sup>リョウギ</sup>又ハ単<sup>ヒト</sup>垂<sup>タリ</sup>又ハ大帷<sup>オホカケ</sup>を垂<sup>タリ</sup>  
板<sup>イタ</sup>二は供<sup>イタ</sup>白<sup>シロ</sup>垂<sup>タリ</sup>又ハ單<sup>ヒト</sup>垂<sup>タリ</sup>又ハ大帷<sup>オホカケ</sup>を垂<sup>タリ</sup>  
著<sup>ツク</sup>之<sup>シ</sup>網代<sup>アジロ</sup>二はそり<sup>ソリ</sup>二はあぢ<sup>アヂ</sup>の<sup>ノ</sup>阿<sup>ア</sup>比<sup>ヒ</sup>供<sup>イタ</sup>二は打<sup>ウチ</sup>を<sup>ヲ</sup>著<sup>ツク</sup>之<sup>シ</sup>ぬり<sup>ヌリ</sup>  
の<sup>ノ</sup>阿<sup>ア</sup>比<sup>ヒ</sup>供<sup>イタ</sup>之<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>あ<sup>ア</sup>ぢ<sup>ヂ</sup>二は<sup>ニ</sup>真<sup>マコト</sup>衡<sup>ヘイ</sup>報<sup>ホウ</sup>  
一 板<sup>イタ</sup>二は一本<sup>ヒトポン</sup>本<sup>ホン</sup>二は又棟<sup>マチ</sup>立<sup>タテ</sup>又棟<sup>マチ</sup>上<sup>ノウエ</sup>二は又四<sup>シ</sup>方<sup>カタ</sup>二は又  
鎌倉年中行事云正月五の夜<sup>ヨ</sup>内<sup>ウチ</sup>行<sup>ユキ</sup>始<sup>ハジメ</sup>管<sup>カン</sup>領<sup>リョウ</sup>出<sup>デ</sup>恒<sup>トコ</sup>





衣四方輿 カ者十 役人淨衣と何れ四方輿と名付る事ハ此の  
二人白 屋祿の四方はむ祿をまゐる故也



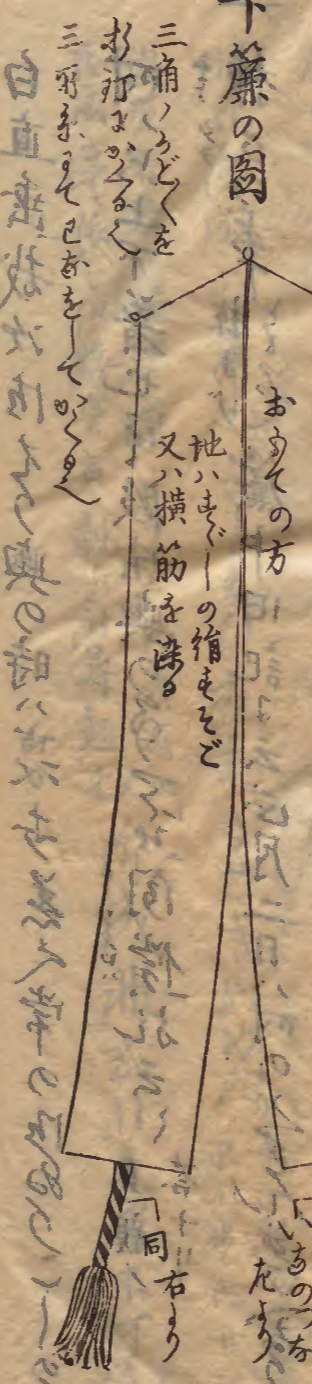
四方ハハハハ四方ハ  
 むきまをまゐる四方ハ  
 一とむ祿とむ  
 むきあげとも云へ上の  
 む祿もたのこつより  
 ハまゝとまゐる



常の二一の  
 屋祿のまゐる

一この下まゐれのよりハ婿入祀はあり今かけやうの繪圖を記せ  
 一幅をぬはすかゝるゝ両方を二幅ナリ

下簾の圖



三浦くまどくを  
 おかまゝとるゝ  
 三羽まゝとてをかまゝとるゝ  
 白直垂はたかぬいとの輿の如く

三儀一統云輿の  
 網ハ八尺七寸也  
 下まゐれ七尺九  
 寸とあり是ハ二  
 つ折りてかゝ  
 くの尺もあ

簾の内まゐる頭とまをハ  
 まゐれの外ハゆゑ



惣長 高位の女房ハ二丈二尺  
 其次ハ一丈二尺三寸

一みせぎぬと云右の一丈二尺二寸の下まゐれをまゐの門へ入てかけぬ  
 せまの外よりかけぬを云五折のものを一とあゝハみせぎぬ  
 かけぬ也下まゐれハ五位の入りたるは外のハみせぎぬかゝる  
 九折七折のものは下まゐれハ十二折の輿の輿ハ七折也  
 一女輿の輿の次才十二折ハ九折ハ七折ハ五折ハ

増入記あり

一 此のえんの事 蜷川記云ホシの油単の事ぬきては、  
 此の但旅の村の事い事い板つては、  
 油単かけぬき見る見及不<sup>辛度</sup>の二風い<sup>ハ</sup>けぬ<sup>ハ</sup>供<sup>ハ</sup>元<sup>ハ</sup>差  
 さ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>基<sup>ハ</sup>様<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>雨<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>才<sup>ハ</sup>古  
 實<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>別<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>不  
 及<sup>ハ</sup>女<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>そ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>し  
 一 輿のあてむ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>才<sup>ハ</sup>古<sup>ハ</sup>実<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>は  
 供<sup>ハ</sup>元<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>え  
 此<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>引<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う

此の事  
 此の事  
 此の事

此の事  
 此の事

此の事これおろされぬ<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>雨<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>入  
 此<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>儀<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>雨<sup>ハ</sup>も  
 よ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>引<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う  
 此<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>表<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>取<sup>ハ</sup>て  
 輿<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>吹<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>引<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>簾<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>より<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>  
 一 近<sup>ハ</sup>来<sup>ハ</sup>婚<sup>ハ</sup>礼<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>列<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>ふ  
 此<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>ふ  
 京都將軍時代は、<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>ふ  
 一 古<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>乗<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>駕<sup>ハ</sup>籠<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>貴<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>乗<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>ふ

雑記七

三

あん、のりあを  
ごとも云太平記  
卷十二云四郎入  
道を備へ乗せ  
て血の付く帷  
を上ニ引覆ひ  
あり

篋ノ字ヲケコト  
ヨム也

源氏物語にハ  
ん不さちの京物  
とあり普賢菩薩  
の京物ハ白象あり  
これらものハ  
馬との物あり

所免を受くる人ハ輿に乗ふこゝハ免あり人ハ騎馬あり

出家者ハ輿にせられぬ馬は多しある人ハ云今の駕

籠を中古旅人ありをのせ又合戦の時手負をのせる為ハ

作り出さる物と古老の物語又云今の駕籠京物あり云

物ハあんご云物を後ハ結構は作りありたるハ異本曾我

物語河津最後の条ハそ有べきハ何れハ俄ハあんだ

云物ハむあき尻をかきのせ宿所ハこまハゆりなれ云ハあん

と云物ハ旅人を乗せる駕籠也山駕籠と云物ハあん

ありとも云ハ和名抄云篋輿 和名 アミイタ 今何り見ハんを乃

字ハアミをアンとソハイの字を略ス

籠乃輿と云物何ハ太平記ハ 才三ノ卷 主上笠置 云日頃の

行幸ハ車ハハリケ風輦ハ 天子のハ 数万の武士ハおかこまれ

月卿雲容ハ何ヤハげハ籠の輿侍馬ハたせけのせられて七条

を東ハ河系をのりハ六波羅ハとせハせ給云ハ籠の輿と

云物ハ今の駕籠京物の類あり

乗物と云輿車の熱名也源平盛衰記廿八の卷 友時森重衛 中将

悦ハ友討して京物出でて内裏ハ巻ス女房母ハは

思百けとせめて志ハゆりハは車ハめハ出給ハハる云

車を乗物と云ハ

一車ハ後より乗るハ 前より 乃ハ

雜記七

世二

盛衰記廿三本曾  
院系ノ条ニ見

輿ハ前より後へとおよりてあり

一 青い色ボク黄と輿也是も前云塗ありと黄多の漆

ぬりある婚入記云ありと云あり又あり

時をのりて岸の河のあり云黄と輿も塗あり

一 儀礼にそと輿をのりて基のりて婚迎記は待圖あり

式部少輔亭御成記

一 ホー基とハ木の長柄をまわくおくまか板の

四足あり奉名をば志と云也榻の字也車は百々耐用之



榻此物也

車の志ハ金物あり

あけまきをばあり

一 ちよくまんぬりてのりて年中法大名法成記はちよく

まんとして乃のぬりて見る糸肉もまきちよくまん

ハ直輦と書ある一 走沓故実ハハ直輦と

一 檳榔毛車とハ車の屋敷の上を檳榔とハ木の葉を

飾るる車也檳榔の葉ハ大くして檳榔の葉の如く檳榔

の葉無耐ハ管の葉を代り用る此檳榔毛の車は車

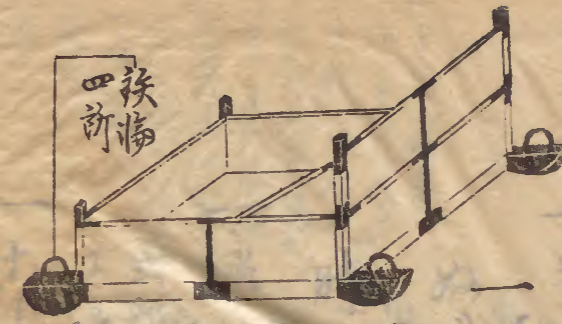
道具も定り何う一条檳榔良公法作の檳榔葉云檳

榔毛赤色の簾錦ハ換芳末濃下簾縹細端帖或時被用

青簾緑青末濃下簾金銅金物榻云西宮記云檳榔毛ハ上

皇以下四位以上通用貞丈云檳榔毛ノ字ハカサル事也鑑ノ

似作多宝寺  
塵取之圖



或入所藏ノ圖  
ヲ以テ先大補入

也檣柳ノ毛ト云車ニテハ無之ビリヤウ本字ハ蒲葵也古ハ此字ヲ知ラズ  
サハハ二ハ檣柳ノ字ヲ借リ用止タルナリ

一 塵取ト云物ハ輿乃類也目置流法要録抄ハ輿ハ行合たる

時ノ式律ヲ手一打ノ事ト云ル也又十巻ノ此ノミセ

ギぬ出ルル輿ハありまき入ちをとりまはうちをけりて通る也

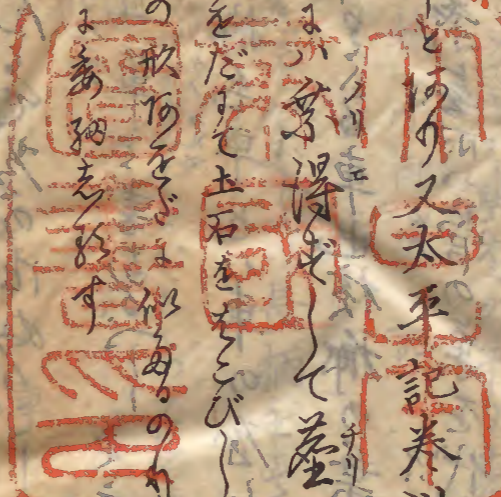
一 太平記卷九合戦ハ痛手を負ひしうける也

馬ハ大勢得たりて塵取ハ昇きて遙の路ハ来りける也

あをたしと土をまきびりしり何とちりあくるをのせをたてり

その形何と云ふは他々の如く相あむりちりとりと云ふべし

考ハ多細志ノ如し



貞丈雜記卷之七

